つながる図書館・博物館・文書館

デジタル化時代の知の基盤づくりへ

石川徹也, 根本彰, 吉見俊哉●著

東京大学出版会

2011年

A5判

280p.

4,410円(税込)

ISBN 978-4-13-001006-1

情報管理 54(8), 514-514, doi: 10.1241/johokanri.54.514 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.54.514>)

この本のタイトルを見て、『情報管理』誌の読者の多くを占める、科学技術情報を提供している情報担当者は、自分の業務からは遠い話と感じられたのではないだろうか。博物館（科学館）はまだしも、美術館や文書館の扱っている美術品や古い史資料の情報に必要性を感じなければ、それらの情報を共有する意義も見いだせないだろう。

だが、企業を例に取れば、離れた場所にある複数の部署で、さまざまなメタデータで管理されている多様な形態の資料についての情報（論文等文字情報、実験データ、製品やサンプル等のモノの情報など）を、社内のどこにいても横断的にアクセスできる環境を構築することに関心があるならば、図書館（L）・博物館（M）・文書館（A）の連携（MLA連携）の取り組みの中に課題解決の足掛かりがあるかもしれない。

この本は、東京大学で図書館学と博物館学、学際情報学をつなぐ横断型の教育プログラムの構築を検討し、その一環として2007年に開催されたシンポジウム「知の構造化と図書館・博物館・美術館・文書館——連携に果たす大学の役割」に基づいて刊行された。東京大学は図書館・博物館の専門職を教育する研究者を養成する（文書館の専門職であるアーキビストの資格制度はまだない）機関のひとつである。また自組織においても、図書館（総合図書館の他に各学部に図書室が分散している）、史料編纂所、博物館、そして大学自身の文書史料等を収集管理している大学史資料室といったMLAに対応する機関がある。デジタル技術の進展に伴い、各館種で資料のデジタル化が進められており、これまでばらばらに運営されてきた各館を連携させる下地も整い社会的要

請も高まっている。そのような中で、各専門職はどうあるべきかが話し合われた。

シンポジウムの内容を受け、本書は以下のような構成となっている。

第1部「MLAとは何か」では図書館・博物館・文書館の現状を歴史的に概観し、MLA連携に向けてそれぞれの「館」が抱えている課題を明らかにする。第2部「MLA連携を考える」では、歴史学や情報学、図書館学、文化資源学など異なる分野から、歴史史資料のデジタル化やMLA連携に関わる具体的な事例の紹介と考察を行う。第3部「課題と提言——MLAの共通基盤整備」では、それらの概説や事例研究をふまえ、本書の編者らによるMLA連携に向けての課題と提言を示している。

図書館・博物館・文書館はそれぞれ知的な情報を取り扱う館として共通点も多いが、こうしてそれぞれの館種の話を集めてみると、各館種での問題意識やMLA連携に期待するものの位相がかなり異なり、果たして連携は可能なのかという疑問もわく。また、理論を研究している研究者と実際に史資料のデジタル化や保存・利用に携わっている研究者との間の意識の違いも見えてくる。だが、それぞれの意識の違いを明らかにすることから連携は始まるのであろう。このシンポジウムは4年前に開催されたものである。「はじめに」にもあるように、MLA連携は「日本ではいままさにさまざまな動きが叢生しつつある状態」にある。震災の復興支援における連携も目にする。今後に期待したい。

（『情報管理』編集事務局）